

## 音源の比較試聴(15)

### —チャイコフスキーのピアノ協奏曲 1 番—

#### 1. 始めに

前報(14)に引き続き、各種音源の再生経路に関するアースアキュライザーを含む種々の対策の効果の確認のため、各種音源の比較試聴を実施します。

#### 2. 音源の比較試聴の試聴方法と音源

各種音源の再生経路に関するアースアキュライザーを含む種々の再構成はアースアキュライザーの活用(6)で述べたとおりで、さらに対策を追加しています。今回もそれらの対策の効果をも、音源を替えて総合的に確認していきます。

音源は、下記の音源のピョートル・イリイチ・チャイコフスキーのピアノ協奏曲第1番を聴いていきます。

アナログ盤

ドイツグラモフォン MG 1001

ラザール・ベルマン(ピアノ)

ヘルベルト・フォン・カラヤン指揮ベルリンフィル

日本コロムビア XL5060

ゲザ・アンダ(ピアノ)

アリチェオ・ガリエラ指揮フィルハーモニア

STAGE+

アレクシス・ワイセンベルク (ピアノ)

ヘルベルト・フォン・カラヤン指揮ベルリンフィル

ダニエル・バレンボイム (ピアノ)

ズービン・メータ指揮ベルリンフィル

ラン・ラン (ピアノ)

サイモン・ラトル指揮ベルリンフィル

エフゲニー・キーシン (ピアノ)

ヘルベルト・フォン・カラヤン指揮ベルリンフィル

#### 3. 音源の比較試聴の試聴結果

アナログのベルマン盤は、1975年の録音で、ベルマンの輝くような切れのよいピアノが、カラヤン指揮のベルリンフィルのしなやかなオーケストラに乗って展開されます。

アナログのアンダ盤は、録音年代不明のモノラル盤でレンジも広くないことか

ら、あまり期待せずに聴き始めましたが、表現力は豊かで力強い演奏です。アンダはベートーヴェンのソナタなどを聴いており、その実力に触れていましたので、納得が이었습니다。

STAGE+のワイゼンベルクとカラヤン指揮ベルリンフィルの演奏は、STAGE+を楽しむ(72)で報告しており、演奏についてはその記載どおりですが、STAGE+を楽しむ(72)の時点からアースアキュライザーなどの効果が加わっており、1967年の収録とは思えないほど、迫力のある演奏が展開されます。

STAGE+のバレンボイムとメータ指揮ベルリンフィルの演奏は、1997年のワルトビューネの屋外ステージでの収録で、バレンボイムが円熟の演奏を聴かせてくれます。屋外ステージでの収録のわりに音質は安定しています。

STAGE+のラン・ランとラトル指揮ベルリンフィルの演奏は、2004年のワルトビューネの屋外ステージでの収録で、くつろいだ雰囲気の中、ラン・ランが表情豊かに演奏していますが、屋外ステージでの収録のわりに音質は安定しています。

STAGE+のキーシンとカラヤン指揮ベルリンフィルの演奏は、1988年のニューイヤーズコンサートで若々しいキーシンの登場で、巨匠カラヤンの前で臆せず演奏しており、大器の片鱗を見せています。

STAGE+の配信は、ソリストと指揮と収録年代が異なりますが、オーケストラはすべてベルリンフィルで、ソリストと収録年代の違いが伺えます。印象的な演奏は、風格のあるワイゼンブルグと若いキーシンですが、演奏スタイルの違いがよく分かります。

#### 4. まとめ

いずれをとっても、アースアキュライザーの投入とそれに伴うアースラインの再構成、さらにはAVドーナッツなどの結果、すべて効果がそれなりに現れ、演奏スタイルの違いも把握でき、格落ちするような音源のフォーマットや再生経路はなくなったことが確認できました。

以上